

○秋山 照子 壺井 花代 (香川明善短大)

【目的】茶の湯と共に発達した会席は、利休などの草創期を経て近世に至り、茶家を中心とする詫び茶、武家社会における大名茶など多様な展開をみせる。中でも、身分制度の固定化が進む近世では大名および諸藩の茶の湯、いわゆる武家茶道の台頭が著しい。これら大名茶の会席研究の一環として讃岐高松藩主の茶会記の会席の分析を行い、既報^{*}では料理、食品、菓子について報告した。本報では同資料により、江戸中期の大名茶の会席の献立構成を明らかにし、あわせて近世の大名茶の中での位置づけをみる目的で研究を実施した。

【方法】高松藩第五代藩主松平頼恭・同六代頼真の茶会記『穆公御茶事記巻上・下』（明和3年・1766～安永8年・1779）（香川県歴史民俗資料館所蔵）を資料として江戸中期・高松藩主の会席の献立構成を明らかにする。またこれの大名茶の中での位置づけをみるために、井伊直弼その他、近世大名の茶会記を資料とした。

【結果】『穆公御茶事記巻上・下』計63回の茶会中、会席の献立構成は、一汁三菜・吸物一品、肴二品が25回・39,7%と最も多く、次いで一汁二菜・吸物一品、肴二品の17回・27,0%である。汁と菜のみでは、一汁三菜35回・55,6%、一汁二菜24回・38,1%が93,7%を占め、その他は一汁四菜3回、一汁一菜1回とわずかである。また、一汁三菜の構成は頼恭時代、一汁二菜は頼真時代と藩主により構成が異なる。これらの会席の構成は、江戸初期の構成・様式共に本膳料理の影響の色濃い時代から移行期を経て、江戸後期の整斉期に至る大名茶全体の流れの中では、移行期から整斉期の間に位置づけられる構成であり、大名茶の時代の変遷と一致している。 *第29回日本家政学会中国・四国支部総会において発表（1982年）